山田秀雄先生とマラヤ研究

――調査部によるマラヤ・シンガポール調査――

吉村真子*

昨年末12月25日に山田秀雄先生が亡くなられた。先生のご遺志で、ご家族だけで葬儀も済まされ、献花や香典も断られ、先生らしいスタイルだった。

山田先生との出会いは私が津田で国際経済の山田ゼミに入った時で、マレーシアを研究対象にしたことから先生のマラヤでの体験を聞く機会が多かった。私が初めてマレーシアに調査で行く際にLee Poh Ping氏（当時マラヤ大学）や津田に来ていた元留学生を紹介して下さったり、私が東大大学院に移ってからもJomo K.S.氏（マラヤ大学）から送られたばかりのA Question of Class（OUP, 1986）をテキストに荻窪の自宅でゼミもして下さった。

山田秀雄先生は日本のマラヤ研究の第一世代として名前があげられるが、東京商科大学（現一橋大学）助手時代に日本軍政下のマラヤ・シンガポールで調査に従事し、その後イギリス経済と共に英領植民地経済史を研究テーマとしたことが大きい。

そもそも東京商大の東亜研究所（東研）が南方調査に関わったのは、戦時下で学術研究の確保のため大学の方から陸軍に話を持ちかけ、軍政総監部の下で調査団を派遣することになったからである。調査には、赤松要教授、板垣與一助教授（当時）をはじめ、東研の所員ほぼ全員が参加している。

現地の調査の担当地域は、東京商大が軍政総監部付きとしてシンガポール、満鉄調査部がマラヤ、スマトラ、東研がジャワ、三菱経済研究所がフィリピン、太平洋協会が北ボルネオとなった。しかし、43年4月20日付で第25軍の司令部がスマトラのブキ・ティンギに移駐したのにともない、満鉄のマレー・スマトラ班も移動したため、総監部調査部がマライ地区の調査も担当することになった。

当時、軍や軍政監部の各部局、進出企業、研究所や大学など、東南アジア全体で千人ぐらいの日本人が調査・研究に従事した。しかし軍政は資源確保と現地自活が主眼で、マラヤ、シンガポールでの調査報告を評価もせず、活用もしなかった。

戦争で人殺しはしたくなかったので調査部の調査に参加したが、どんなに現地の人々の側に立って活動していたという自負があっても、日本の東南アジアにおける軍政支配の一翼を担ったことに変わりはない、と山田先生はおっしゃっていた。「侵略戦争の兵隊に動員されることを恐れるあまり、その軍属つまり事実上の手先となる、というこの矛盾は、私の胸に突き刺さっている」と近年も書いている。

当時の体験についてはいろいろと聞いた。シンガポールで現地の人が「ケンペイ」と聞いて顔色を変えるのを見て日本軍の大検証を知ったこと、ヌグリ・スンビランの農村には一ヶ月滞在して調査したこと、インド国民軍の宣伝映画のために来た小津安二郎監督と友人をシンガポールで引き合わせたこと、各地の農村に入っていて43年から44年になって食糧不足が深刻化したことなど。また、現地の人

* 法政大学社会学部教授

と親しくしていたことや地区の憲兵隊長の評判が悪いと話したことで憲兵隊から取り調べも受けている。

敗戦後、クアラルンプル郊外の日本人捕虜収容所では、通訳として使われた。収容所で、食糧不足で芋とタピオカを植えさせられ、また門の外から、マラヤの解放のために活動しないかと日本人（マラヤ人民抗日軍）から勧誘もされた。

先生は通訳であったため、復員船で名古屋港に着いたのは1946年6月と遅い帰国だった。復員の際、没収を恐れて表紙と地図をはがして隠し持って帰ったのが調査報告書「ヌグリ・センビラン州ノ土地調査ト村落農民」で、当時は珍しい現地の日本語の活字印刷の報告書は、私も写しをいただいた。

戦後、山田先生は、イギリス経済およびイギリス植民地経済史を対象に研究を進めている。

マラヤ経済関連の論文として、「イギリス資本とマラヤ経済史」（『経済研究』1965 年 10 月）、「マラヤの植民地化の起源と錫」（山田[1971]）、「マラヤの錫鉱業の発展と植民地支配：19 世紀マラヤ錫鉱業史覚書」（山田編[1973]）、「19 世紀後半におけるマラヤ錫鉱業の発展」（『経済研究』1974 年 10 月）、「マラヤ・ゴム栽培業史覚書」（『経済研究』1975 年 7 月）などがある。

山田先生は早くから、Wong Lin Ken や Yip Yat Hong の錫産業の研究を用いたり（山田[1973]）、両大戦間期の Agency House 経営代理制度の役割やマレー人小農と土地保護立法についての考察をおこない（山田[1975]）、後の小池賢治氏（経営代理制度研究、山田先生の「イギリス帝国経済史研究会」メンバー）や猿渡啓子氏（英系資本研究、津田塾大学山田ゼミ出身）らのマレーシア研究につながっている。

先生は教育に熱心で、著作が少ないのは残念であるが、教えていただいたことは多かったし、東大に行く際に国際経済の森田桐朗先生を紹介して下さったのも、アジア経済研究所の堀井健三先生に会うよう勧めて下さったのも、山田先生であった。マレーシア研究に進んで山田先生と共に議論することが多かったのは幸運であったが、もっと話を聞きたかったし、まだ亡くなったことが実感できない。

東京商大によるマラヤ、シンガポールの調査は深見純生「東南アジアにおける日本軍政の調査」（『南方文化』第 15 号、1988 年 11 月）が取り上げており、また私も参加している「日本軍政下の英領マラヤ・シンガポール」プロジェクト（トヨタ財団助成、代表研究者明石陽至氏）に関連して、調査部報告書が龍渓書舎から復刻される予定である。

山田秀雄氏　1917 年生まれ。2002 年 12 月 25 日没。85 歳。一橋大学名誉教授。東京商科大学助手時代に軍政総監部調査部としてマラヤ、シンガポールで調査。1981 年に一橋大学定年退官後、津田塾大学国際関係学科教授、八千代国際大学教授を歴任。専門は、イギリス経済およびイギリス植民地経済研究。元アフリカ研究学会会長。

おもな著書・編著書に『イギリス植民地経済史研究』岩波書店、1971 年;『植民地社会の変容と国際関係』アジア経済研究所、1969 年;『植民地経済史の諸問題』同、1973 年;『アフリカ植民地における資本と労働』同、1975 年;『イギリス帝国経済の構造』新評論、1986 年など。

なお「山田秀雄先生をしのぶ会」は、高島善哉先生の会、一橋大学および津田塾大学の山田秀雄ゼミ生などを中心として、後日開かれる予定である（問い合せは吉村まで）。